

## なぜ私は「三粒の種」を作るのか？

角信喜

三粒の種には三人のメンバーがいて、三人それぞれの出発点があります。

これは言い出しっぺ 角 信喜(かどのぶき)のあらすじです。



の出発点は考古学。弥生時代にあります。ちょっとだけそのお話から。

大昔から変わらない、グローバリゼーションの仕組みが常に僕の頭の中にあります。

むかーし、むかし、弥生時代の人々は、稲作を始め、定住を始め、蓄えるという事を始めました。

縄文時代と違い、食と住が安定して、人が死ににくくなったから、きっと当時の人々は幸せだったろうと思います。

でも、人が死なないということは、人が増えるという事です。事実、稲作開始期は、数十年で人口は何十倍にもなります。人口が増えていくと、それに伴って居住地も水田も際限なく必要となります。結果、自分たちが住んでいるところだけでは、人口を維持出来なくなります。

そうすると当然、他の人達が住んでいる土地に手をださなければならなくなる。

争い・奪い合いという形で。

これは、自分たちの幸せを守るために、他人の幸せを奪う(奪ってもいい)グローバリゼーションです。

弥生時代が始まってから、約2700年、

今も、昔も変わらない。今世界中に広がっているグローバリゼーションの弊害と同じことが、2700年前からずっと続いています。

愚かです。

そこで僕は、この考え方・問題意識をクリアするという目的のもと事業を始めました。

この事業で最終的に目指すのは、自分のために奪う事をしない「与える社会の実現」です。

しかし、実際与える行為はとても難しい。

知らない人や知らない事へ与える事は、なかなか出来ません。

なので、まずいろんな関係性を知る事、そして今までなかったコミュニケーションの創出や、薄れてしまったコミュニケーション

の復古が必要となってきます。社会を濃くするとか広げるといった言葉がいい気がします。

これが、僕の事業です。夢物語のようかもしれませんが、与える仕組みで回っていた部族が歴史上存在しているんです。しかも、いくつも。なので、不可能ではないと考えています。

ただですね、きっとこれは、僕一代で成せることではありません。

きっと、ずっと先の子供達が成す事なんだろうと思っています。

それに向けて、一足早く気づいた僕に出来る事は、彼らがそれを成しやすくする「当たり前」(社会基盤)を一つでも多く作っておく事なんだと考えています。

そこで、やっと出てきますが(笑)

その当たり前を作っていくのが、この「三粒の種」です。

津屋崎という土地で、自分の手の届く範囲で、今までに無かったコミュニケーション、薄れてしまったコミュニケーションを、今必要な「当たり前」として実践しながらお裾分けして行きます。

このコミュニケーションは、「人との」ではなくて、ありとあらゆる「人・もの・こと」とのコミュニケーションを指します。世界は人だけで出来ている訳ではないですからね。

かつて、アメリカのアイゼンハウアー大統領は、「世界中の人々が会える機会を与えれば、彼らは理解し合い親友になり、世界平和は訪れる」(意訳)と言ったそうですが、それに似た考えなのかもしれません。

これを「もの・こと」まで広げて、地域レベルでモデル化することをやっている気がします。

志だけで、どうなるかわかりませんが、この事業が、社会を、暮らしを、豊かにすると信じているし、この課題解決を最も面白いものと感じています。

まずは、行動です。

